

第12章 がんばれ『真田丸』

NHK大河ドラマ『真田丸』は、おもしろい番組だった。
脚本家・三谷幸喜「小さくても勝てます」。

第二十回「前兆」ぜんちよう

秀吉の側室そくしつ、茶々（演・竹内結子）に子ができた。この時、秀吉は五十三歳。城下では誰の子かと噂になる。聚楽第じゅうらくていの壁に落書きをした犯人は不明。飲んだくれた門番に罪をかぶせる。門番は本願寺の僧侶、尾藤道久びしどうきゅうだが字が書けなかった。

尾藤道久「俺は、字が書けねえのさ」。(僧侶で字が書けないとは「ありえない」。設定に無理がある)。すると、石田三成に「坊主だったのに字がかけないのか」と言わせた。

真田信繁まんだのぶしげ「結局すまじ、犯人は誰だったのでしょうか」と言わせた。

石田三成「民たみの仕業だ。大勢の民が秀吉に反感を持っている。このままではいかん。何か民の

心をつかむ手立てはないものか」

秀吉の正室・北政所（演：鈴木京香）「京都と大阪の人たちが喜ぶことを考えてください」

信繁「思い切ってカネをばらまくというのはどうでしょう」

三成「いささか品が無いな」

正室「それくらいやったほうがいい。殿下の子が生れるのです。派手にまいりましょう」。

この、テンポのいいやりとりを観ている、私は手をたたいて笑った。「すばらしい、脚本家・三谷幸喜は天才だ」。

◆石田三成（演：山本耕史）は三十歳、加藤清正は四十歳（演：新井治文）、織田信長（演：吉田鋼太郎）は五十歳で亡くなった。

第二十七回「不信」

秀吉は信繁（演：堺雅人）に官位を授けると言います。信繁は一つ違いの兄・信幸（演：大泉洋）にも官位を願ひ出る。その結果、信幸は従五位下伊豆守（じゅごいのげいずのかみ）を授かり、信繁は従五位下左衛門佐（さえもんすけ）を授かった。しかし、信幸は弟に情けをかけられたと激しく憤った。それを知った父・真田昌幸（演：草刈正雄）は信幸に言う。「ばかなことを言うものではない。もらえるものは病氣以外もらっておけばいいんだ」と。私は「なるほど」と思った。まじめな信幸は、いつまでも不満だった。

第三十一回「終焉」しゅうえん

兄・信幸のぶゆきは、不本意だったが、政略結婚のため徳川家の家臣・本多忠勝ほんだただかつ（演：藤岡弘）の娘・稲いな（演：吉田羊）を嫁にすることになった。普通は里にかえされるはずの元妻・こう（演：長野里美）は、側室になって留まり、正室の身の回りの世話をしている。正室の稲に男子ができた。同時に側室・元妻こうにも男子ができてしまった。信幸は二人の男子の父親になった。真田昌幸まんだまさゆきは両手に赤ん坊（孫）を抱いて大喜びだった。

信幸は稲の父親・本多忠勝になかなか言い出せないでいる。それを知った真田昌幸は信幸に、「なんでもっと早い内に言っておかなかったのよ。世の中、先延ばしにしていることなど何ひとつない」と言う。「しかし父上」と信幸は困り果てる。

私は、「世の中、先延ばしにしていることなど何ひとつない」というセリフに「そうだなあ」と感じ入った。

第三十三回「動乱」

秀吉の遺言を無視する徳川家康（演：内野聖陽）に対し、石田三成は怒り、徳川屋敷を急襲する事を決意するが、暗殺計画が漏れて、徳川屋敷には諸大名が警護にかけつけた。三成の呼びか

けには誰も応じなかった。三成と家康では格が違った。幼少の頃から秀吉に可愛がられた三成を、みんなが好く思っていなかった。

石田三成は、「今日がなければ、明日はない」と、いきり立つ。どうする三成。

第二十四回「滅亡」

小田原城に一人乗りこんだ真田源次郎信繁の活躍で、北条氏政（演：高嶋政伸）はまげを落とし、秀吉の軍門に下った。氏政（うじまさ）、氏直（うじなお）の命は救い、それと引き換えに、城を受け取る約束だったが、「氏政は死んでもらおうか」と秀吉があっさり言った。「それではだまし討ちでございませう」と言う信繁の忠告を秀吉は聞き流した。

「生き恥はさらしとうない！」氏政は切腹した。息子の氏直は出家して高野山（こうやさん）に送られた。これにより、北条は滅亡した。

おや？ 黒田官兵衛が出てこなかった。前回のNHK大河ドラマ『軍師官兵衛』では、秀吉から頼まれて一人で小田原城に乗り込むのは黒田官兵衛（演：岡田准一）だった。官兵衛の活躍で北条氏は滅んだことになっていた。「これは変だぞ」私だけでなく、小田原の童謡の会員みんながそう思った。

第四十回 「幸村」
ゆきむら

この回で、幸村の幼なじみの、きり（演：長澤まさみ）に、「北条が落ちたのは、あなたではなく、後から会いに行った、なんとか官兵衛さんの手柄ですから」と言わせた。これで小田原の人たちも納得した。きつとNHKに抗議が殺到したのでしょう。私は氏政役の高嶋政伸さんの白目を出した演技に感動した。童謡の会でも「政伸君、うまかったですよね」と、ほめちぎった。観ていない人は、何の事だろうと思つたに違いない。「好きな俳優さんばかりが出ています」と弁解した。氏政は「日の本を分ける大戦をやつてみたかった!」と言つて死んで行つた。『軍師官兵衛』の時も、今回も、「兵糧があつたのだから打つて出ればよかつたのに」というのが私の意見です。回想シーンで、上杉景勝（演：遠藤憲一）が「死に様は、生き方を映す鏡。己に恥じぬよう生きるのみじゃ」と言つた。

第四十三回 「軍議」

豊臣秀頼（演：中川大志）の御前で大物の家来五人を集めての軍議が開かれた。幸村だけ家康のいる京へ攻め込む事を主張するが、みな反対する。五人は、それぞれの夢や希望があり、この戦いに参加していた。

幸村の策に秀頼も賛成しかけたが、休憩をはさんだ長い軍議は茶々の一声で、ろう城と決まっ

た。結局、軍議はしなかつた事と同じだった。

茶々の叔父・織田有楽齋（演・井上順）は、のらりくらり軍議に口出しをし、幸村を褒めたりしていたが、最初から戦いたくなかつた。ろう城に決めていた。「では、では、ろう城ということ。会議はお開きといたしましょう」と、まとめた。幸村ら五人は、あ然となつた。有楽齋は、茶人・織田信秀の十一男。同じ兄弟には次男・信長がいる。

この成り行きに、私は「順ちゃん、上手！」と、テレビに向かって拍手を送つた。織田有楽齋役の井上順は、その昔、グループサウンズ『ザ・スパイダース』の人気歌手だった。ヒット曲は「夕陽が泣いている」や「あの時君は若かつた」などがある。

大物の家来五人は、真田幸村（演・堺雅人）、後藤又兵衛（演・哀川翔）、毛利勝永（演・岡本健一）、長宗我部盛親（演・阿南健治）、明石全登（演・小林顕作）。この時、後藤又兵衛は五十五歳。俳優の哀川翔も五十五歳、はまり役だ。

『真田丸』では、今までも軍議が何回も開かれた。脚本家の三谷幸喜が得意とする場面だ。とても面白い。ところが時代劇での軍議は不評で、視聴者は敬遠した。『真田丸』は、過去最低の視聴率となつてしまった。最後のどんでん返しに期待したい。あと、二ヶ月だ。頑張れ『真田丸』。

第四十七回 「反撃」

大阪城に大砲が撃ち込まれ大勢の犠牲者が出ると茶々（演・竹内結子）は気が弱くなり、和

睦ぼくすると言いだした。今度は女たちの和睦交渉が開かれた。家康（演：内野聖陽）方からは阿あ茶局ちのつぼね（演：斉藤由貴）。豊臣方からは初（演：はいだしようこ・浅井家三姉妹の次女で茶々の妹）と大蔵卿局おおくらさやうのつぼね（演：峯村リエ・茶々の乳母）それに、きり（演：長澤まさみ）が付いて行く事になった。会議中、きりの活躍（「足がつつた！」と叫び転げまわる）にもかかわらず、大阪城の外堀さらに内堀と真田丸砦を破却することが決まった。それは、豊臣方に勝つたと見せかけ、牢人たちを解散させる家康の作戦、思う壺だった。

豊臣秀頼は、「望みは捨てておらぬ。望みを捨てぬものだけに道は開ける」と言い、牢人たちも真田幸村を大将と認め「策さく」を求めるが、真田丸を失った幸村に、もはや策はない。時すでに遅し、どうする幸村。また、次週も観なければいけなくなった。

第四十九回「前夜」

豊臣方と家康との最終決戦、大坂夏の陣が始まった。真田丸を取り壊され、堀を埋められ戦えなくなつた幸村は、死を覚悟していた。それでも、幸村は策を立てるが、策は、ことごとく漏れていた。幸村は漏らしていた人物に気がついた。「我々の話を最初から全て聞いていた者だ」「それは、だれだ」。再放送も観たが、暗くて分からなかつた。老人のようだった。暇な老人、囲炉裏の側にいつもいる男といえ、真田家重臣、きりの父・高梨内記たかなしひなき（演：中原丈雄）だ。

私「なぜ、内記が裏切ったの？」

夫「幸村の子を助けるためさ。家康と通じていれば捕らえられた時、助けられる」
私「なるほど、内記は幸村の子の養育係だったものね」。夫と私は勝手に納得した。

幸村は、幼なじみの・きり（演：長澤まさみ）を抱きしめ、別れのキスシーンをする。「エッ、時代劇にキスシーン？」と驚いた。さらに驚く事に、キスをしながら、きりがしゃべった。「遅い、せめて十年前に。あの頃が、私、一番きれいだったから」と。……ありえない。

後日、昼の人気番組NHKテレビ『スタジオパークから こんにちは』に出演した脚本家の三谷幸喜さんは、「僕が書いたと思ったかもしれないませんが、あそこは堺雅人さんが提案してやった事です。長澤まさみさんも、キスをしながらしゃべるのを一度やってみたかったです。僕が書いて、すばらしいと思われる光栄です。トクしました」と言ったが、私は信用していない。好きで過ぎてている。このキスシーンは、三谷幸喜さんが考えた計画的な脚本と思いたい。

第十回「妙手」では、一兵も死なせずに敵を追いやる策は、梅（演：黒木華）真田家に仕える地侍・堀田作兵衛の妹）や、梅のお腹の赤ちゃんの命を守るためだった。そして、「そなたは、なくてはならぬ人だ。私の妻になってくれないか」「そのお言葉、お待ち申しておりました」信繁と梅は、ひとと抱き合った。

第十一回「祝言」では、兄の真田信幸（演：大泉洋）に信繁が「梅が、みごもったので結婚することにした」言うところ「エッ、やけに早いな、もう、口吸いなども、すませたということか」と

いう場面があった。

私は、第四十九回「前夜」の、きりとのキスシーンは、梅にプロポーズする時に、三谷幸喜さんの頭の中に、すでにあつたに違いないと思つてゐる。

第五十回「最終回」

豊臣方と徳川の最終決戦。豊臣方は、大坂城を出て野戦になつた。先頭に立つ赤い甲冑、馬に乗つた幸村が、かっこいい。手をたいて応援した。私の声が台所に響き渡つた。

形勢は圧倒的に不利だったが、毛利勝永もりかつながらの活躍により戦況は一転、豊臣方は徳川軍を次々と撃破する。幸村は「勝てる！」と思つた。

幸村軍の騎馬隊の前に、伊達政宗（演：長谷川朝晴）の鉄砲隊が立ちはだかつた。しかし政宗は、「弾がつきたー」と兵を引いた。幸村は助かつた。

「よかつた。政宗もいい所がある」。しかし戦国時代だ、ありえない。この先、ありえない事ばかりでドラマが展開して行く。三谷幸喜さんの腕の見せ所だ。

幸村の策さくをいつも聞いていて徳川方に漏らしていた人物は、秀吉に恨みを持っていた台所を預かる老人だった。彼は、「豊臣が亡びればいい」と思つてゐた。娘を秀吉に手込めにされ、妻も一緒に死んだ。恨みは深かつた。

幸村と佐助は老人を殺そうとするが、焼き鳥の串を腹に刺し、自害した。焼き鳥の串で自害と

は、ありえない。やはり、実際には死んでいなくて、ヨロヨロしながらも計画通り、油を撒いて城に火を放つ。城から黒煙が高く上がった。

死を覚悟する茶々に幸村は、「望みを捨てなかつた者にのみ、道は開ける」と諭す。印象に残る言葉です。

しかし、秀頼（演…中川大志）の元に、幸村が寝返つたという噂がひろまる。それは家康の作戦。うろたえる秀頼に茶々が言う「望みを捨てなかつた者にのみ、道は開ける」と。この回では、二度もこの言葉が使われる。

怒りの幸村は家康のいる本陣に一騎で突き進んだ。鉄砲を持っている。一発目は外れ、家康は助かつた。二発目は暴発し、幸村は手に負傷してしまった。大軍を率いた家康の目の前にいる幸村が助かるとは意外。ありえない。

悪いことに、豊臣の目印の「ひょうたん」を持ったグループが勝利したと思ひ込み、城にもどつた。この小さな、あさはかな行動が、敗北につながって行く。これを見た豊臣軍は、自分たちが負けたので、城に取って返すものと勘違いした。城からは火の手が上がっているのだから、勘違いするのも当然。

幸村は振り返り驚く。「そんな馬鹿な」。それでも、幸村と佐助は残つた者たちと共に必死で戦つた。煙幕を張り、佐助も大活躍する。佐助は、五十五歳。忍者なのに「全身が痛い」いとと云うほど疲れ果てた。仲間の忍者軍団を呼んで、もっと頑張つてほしかった。

大坂城では、高梨内記が幸村の子を助けるために体をはって家康の兵士と戦う。年老いている

ので力が出ない。すぐ討ち死にした。私たち夫婦は、内記を裏切り者と思い込んでいた。「ごめんよ」。幸村は、出陣を前に甲冑を着けながら自分の人生を振り返って「この世に生きた証あかしを何か残せたのだろうか？」と高梨内記に問いかける場面がある。内記は「人の値打ちは時が決めるもの」と答えた。

幸村の最後は自害。武士として当然の結末だった。七年後、兄の真田信幸は、松代藩まつしろはん十万石の徳川家の大名として生きのびた。兄弟の命運を分けたドラマだった。真田幸村は、スーパーマンと並ぶ日本のヒーローとして名を残した。「小さくても勝てます」。

躍動感のある曲

『真田丸』のメインテーマのソリスト三浦文彰みづらふみあきさんは、ウィーンを拠点に活動する二十三歳のヴァイオリニスト。両親ともヴァイオリニストの音楽一家。十六歳でウィーンに留学し、ハノーバー国際コンクールにおいて史上最年少の十六歳で優勝した。

メインテーマを作曲した服部隆之はつとりたかゆきさんには、「侍の気持ちで弾いてほしい」と託された。「ただ格好いいだけでなく、中間部は迷いもあって、最後は壮大に盛り上がる。この音楽にどんな音色が合うか考えて演奏した」。

放送第一回から演奏のすばらしさは際立っていた。尺八との掛け合いもみごとだった。これは、作曲・編曲の力も関係していた。余韻が残る名曲になった。使用しているヴァイオリンは、NPO 法人イエロー・エンジェルより貸与された「B. Guadagnini (一七四八年製)」。

あとがき 歌のゆくえ

生活の中の一番に「童謡の会」があります。この三十年間、手塩にかけて育てた会です。なつかしい童謡や唱歌だけでなく、新しい歌も歌って意識の高い童謡の会にしたいと思っています。「孫が家に来て『虹』を歌って踊ってくれました。その歌、おばあちゃんも知っているよ、童謡の会で歌ったと、言ったんです」。嬉しそうに話してくれる人がありました。

「♪虹が虹が 空に架かって 君の君の 気分も晴れて きつと明日は いい天気……」

「大好きな童謡や唱歌を、先生と一緒に歌うことができ、とても楽しいです」「歌って元気をもらっています」「先生の童謡の本が好評です。頑張ってください」「童謡や唱歌を歌うと、家族・親戚・友だちの事を思い出して涙が出ます」「新しい童謡も楽しいです」「お休みをしないように頑張ります」「歌う会と先生のお話、楽しみにしています。寒さ厳しき折、くれぐれも御自愛ください」。このような童謡の会員に支えられています。みなさんに喜んでいただける童謡の会にしたい。私は歌うことが大好きです。まだまだ歌いたい歌があります。さわやかに、ほがらかに歌って元気に生きて行きましょう。「♪ toi toi toi いい日であるように」と願っています。

平成三十年（二〇一八年）七月一日

池田 小百合

著者紹介

池田 小百合（いけだ さゆり）

神奈川県生まれ。国立音楽大学卒業。

童謡の会を主宰「あしがら童謡の会はとぼっぽ」「童謡を歌う会赤い鳥」

「童謡を歌う会青い鳥」「童謡を歌う会玉手箱」「童謡を歌う会真鶴」。

著書「童謡を歌おう」（センチュリー）。「童謡・唱歌 風だより」（春陽堂）。

「満点ママ」「歌って暮らせば」「歌が好き」

「童謡で遊ぼう」「読む、歌う 童謡・唱歌の歌詞」

「童謡と唱歌 歌唱の歴史 I（春夏のうた）」

「童謡と唱歌 歌唱の歴史 II（秋冬のうた）」（以上、夢工房）。

「子どもたちに伝えたい日本の童謡 神奈川」

「子どもたちに伝えたい日本の童謡 東京」

「もっと好きになる日本の童謡」（以上、実業之日本社）。

CD解説「にほんのうた」第二集、第三集、第四集（A V E X）。

Finan「あの歌この歌」銀行フリーPR誌（きんざい編集部）。

マイウェイ「かながわ童謡・唱歌物語」No.79（はまぎん産業文化振興財団）。

インターネット「池田小百合なっとく童謡・唱歌」（事典）などがある。

歌いたい歌がある

二〇一八年十月十日 初版発行

定価 本体価格 一七〇〇円＋税

著者 池田 小百合 ©

制作・発行 夢工房

〒257-0028 神奈川県秦野市東田原200-49

TEL(0463)82-7652 FAX(0463)83-7355

<http://www.yumekoubou-t.com>

2018 Printed in Japan

ISBN978-4-86158-084-0 C0095 Y1700E

日本音楽著作権協会(出)許諾第 1808033-801